

大学生の歌の記憶

- 唱歌と童謡を中心として -

村上 晴美・米澤 好史

(大阪市立大学学術情報総合センター・和歌山大学教育学部)

Keywords: 歌, 記憶

1. 目的

日本人がよく知っている歌の長期記憶の特性について調べる。記憶条件の差をできるだけ少なくするために、多くの日本人が学校教育や家庭の中で覚える機会の多い歌を題材として検討する。

2. 方法

被験者は和歌山大学の教育学部の学生 159 人(平均年齢 19.8 歳)である。日本の代表的な歌として、「日本の歌」切手シリーズにとりあげられた歌 18 曲と、筆者らの研究の追試(村上 99)として「蛍の光」「仰げば尊し」を材料とする。

被験者を 3 グループに分ける。グループ A(53 人)には、「荒城の月」「夕焼けこやけ」「もみじ」「ふるさと」「冬景色」「ふじ山」「蛍の光」の 7 曲、B(54 人)には「春の小川」「さくら」「うみ」「おぼろ月夜」「日の丸」「夏の思い出」「仰げば尊し」の 7 曲、C(52 人)には「浜辺の歌」「赤とんぼ」「子守歌」「椰子の実」「春が来た」「花」の 6 曲を、質問紙上で題名を提示して記述させた。歌詞の記入後に、歌詞を「/」で適当に区切って、歌詞と旋律の確信度を 3 段階(3:自信がある, 2:どちらともいえない, 1:自信がない)で評定させる。

実験は 2000 年 2 月 2 日に大教室で一斉に行った。

3. 結果と考察

全く再生されなかった「冬景色」を除く 19 曲を分析の対象とする。最も再生が良かった歌は「春が来た」(52 人, 100%)で、悪かった歌は「椰子の実」(2 人, 3.8%)であった。

3.1 再生の分析

歌詞はある単位でまとまって再生されている。唱歌や童謡では、まとまりの単位は(a)4 から 8 字(五七調の、五や七の区切りに相当)と、(a)が 2, 3, あるいは 4 つまとまった単位(フレーズの単位に相当)に大別される。前者をユニット、後者をフレーズと呼ぶ。

表 1: 番とフレーズ毎の単語の正再生率

| | (1) | (2) | (3) | (4) |
|-----|------|------|------|------|
| 1 番 | 0.93 | 0.62 | 0.46 | 0.44 |
| 2 番 | 0.12 | 0.08 | 0.04 | 0.05 |
| 3 番 | 0.17 | 0.14 | 0.04 | 0.05 |
| 4 番 | 0.07 | 0.07 | 0.00 | 0.00 |

()内はフレーズ

1 番の第 1 フレーズの正再生率がすべてのフレーズの中でもっとも高く(19 曲すべて)、1 番の正再生率が他の番と比べて高い(19 曲すべて)。再生曲線は、第 1 フレーズの正再生率が最も高くあとは右肩下がりである(19 曲すべて)が、第 4 フレーズの正再生率が第 3 フレーズと比べて高いことなどがあった。2 番以降のどの番の再生が良いかは歌によって異なる(表 1 参照)。

データを分析したところ、各番のうたい出し、題名のある箇所、各番のうたいおわりが、再生が良いことに関する要因として見つかった。ここではそれぞれ「うたいだし効果(初等効果)」「題名効果」「うたいおわり効果」と呼ぶ。歌詞の

長さや再生率が一定水準以上の歌 11 曲の 1 番に関してフレーズの 1 要因の分散分析を行ったところ主効果が見られ $[F(3,40)=13.24, p<.01]$ 、第 1 フレーズとその他のフレーズの間有意差が見られた。

旋律と歌詞の区切り線のある箇所はほぼ一致しており、旋律の確信度が 3 で歌詞を再生できない箇所のある被験者が 144 人(90.6%)、歌詞が再生されている箇所の旋律の確信度がすべて 3 である被験者は 129 人(81.1%)であった。旋律が思い出されたのに歌詞を思い出せないことはしばしばあるが、歌詞が思い出された場合には多くの場合旋律も思い出していることがわかる。

ユニットの単位で「仰げば尊し」の一番の歌詞を分析したところ、無再生 222, 正再生 179, 誤再生 13, 正誤混合 11, 正無混合 5, 正誤無 2 であった。歌詞の記憶においては、多くの場合、まとまった単位で正しく再生されるか何も再生されないかどうかであるが、部分的に思い出された部分を手がかりに誤った言葉が補われることがわかる。

3.2 誤再生の分析

誤再生の発生しない歌は一つもなかった。正しく歌を再生した被験者のうち誤再生をおこした被験者は、最も少ない「春が来た」で 11 人(21.1%) 最も多い「椰子の実」で 2 人(100%)であり、平均すると 49.4%であった。歌詞の誤再生がごく普通におこる現象であることを示している。

実験で得た誤再生は、(a) 歌誤り(最初から誤った歌を再生)、(b) 異歌混入(途中から異なる歌を再生)、(c) 番混同(同じ旋律で違う番の歌詞を再生)、(d) 同旋律異箇所混同(同じ旋律で異なる箇所の歌詞を再生)、(e) 新規構成(歌詞にない語句を再生)、(f) 異旋律異箇所構成(異なる旋律で異なる箇所の歌詞を再生)、(f) 誤字に分けられる。

歌毎に誤再生をおこした被験者の総計は、新規構成(226 人)、歌誤り(72 人)、番混同(54 人)、異旋律異箇所構成(40 人)、誤字(32 人)、同旋律異箇所混同(6 人)、異歌混入(6 人)である。

データから制約を分析した。歌誤りの原因は題名から歌詞の検索失敗である。異歌混入の制約は、旋律と歌詞の類似である。歌詞混同の制約は字数制約と、歌詞の交換可能性(または、文脈制約)である。語句構成の制約は、字数、母音、統語文脈、品詞制約である。語句構成の原因は、制約の枠組み内での合理化である。

4. 全体的な考察

歌詞の記憶は、全体(意味)ではなく要素の逐語的な記憶であり、歌詞の記憶における構成的処理は、要素の再配置と語句構成で特徴づけられる。データは、歌詞と旋律はユニットなどの単位で別々に格納されているが緩やかに統合されており、多くの場合同時に再生されるという考え方に適合する。

文献

(村上 99) 日本語の歌詞の長期記憶における構成的処理 「蛍の光」と「仰げば尊し」を題材として, ICSS/JCSS99, 842-845, 1999.

(MURAKAMI Harumi, YONEZAWA Yoshifumi)